

最近の中国情勢 華国鋒体制の矛盾

中国の政治潮流の変化は大きく、また速い。この一月八日は、周恩来首相の一周忌であったが、亡き周恩来を追慕する民衆の心の傾きは、いまや新しい政治潮流となつて中国社会の基礎を流れ、さうに広まって失脚した鄧小平・副首相の再復権を強く求めるにいたつてゐる。世紀の宰相の死であつたのに、『人民日報』には周恩来追悼の論文や記事もほとんど出ず、暗に周恩来路線の継承を誓う弔辞を誦んだ鄧小平が、その葬儀の日以來、政治の表面から姿を消していった昨年のごとく比べると、状況はまさに隔世の感がある。

昨年九月九日の毛沢東の死をまつて表面化した中国共産党中央の激しい権力的角逐は、周知のように十月七日の衝撃的な北京政変となつて決着し、毛沢東側近であつた王洪文、張春橋、江青、姚文元の文革派上海グループの面々は、極悪非道の「四人組」(四人組だとして一網打尽にされた。そしてのちに明らかにされたように、「四人組」逮捕という酷烈な代償によつて、その同じ日に党中央は華国鋒の党主席兼党中央軍事委員会議長に就任を決議したのである。

中嶋 嶺雄



権力の中枢は、また「食うか食われるか」の状況にあつた。『十二月二十二日付』人民日報「社説」『四人組』のねらいの中心は党と国家権力のさん奪にある(一)のである。従つてこのよ

うな北京政変の本質は、やはり華国鋒のクォーター(傍聴筆者)なのであり、そのことは、政変の経緯を詳述した十二月十七日付「人

華国鋒体制の矛盾

民日報」編集部論文「敵し寸前の狂気のあがき」を読めば読むほど歴然とする。たしかに、「四人組」は、毛沢東死後、「既定方針どおり事をほご」との人間道徳より、「自己主体」、「四人組」が改ざんしたものだとされている。を武器に、急戦、党中央を固めようとしたのであつたが、昨春来の「進歩派」批判がいささかも根づいて、なかつたことに示されるように、文化大革命の中心の担い手であ

たのであり、一連の事実からすれば、極限状況におけるリール違反はむしろ華国鋒の側にあつたのである。はなはだの疑念を誘ふ。もとより、「四人組」は大衆から浮き上つた存在であつた。たゞ、「四人組」打倒は中国民衆にとつても幹部にとつても歡喜すべき出来事ではあつたが、しかし、一方では、一昨年九月、江青夫人が大衆演説の文化大革命の中心の担い手であ

たのであり、一連の事実からすれば、極限状況におけるリール違反はむしろ華国鋒の側にあつたのである。はなはだの疑念を誘ふ。もとより、「四人組」は大衆から浮き上つた存在であつた。たゞ、「四人組」打倒は中国民衆にとつても幹部にとつても歡喜すべき出来事ではあつたが、しかし、一方では、一昨年九月、江青夫人が大衆演説の文化大革命の中心の担い手であ



演説する華国鋒主席(新華社共

最近の中国情勢

生産点や党、政府および軍機構の末端ないしは中間の単位を掌握してない「四人組」に可能なことは、結局のところせいぜい『人民日報』など彼らが握つていたマス・メディアを動員して先制攻撃的なプレス・キャンペーンを展開することぐらいであつた。

こうして「四人組」は大衆運動を發動して自己の立場を固めようとはかつたのであつたが、そのよ

り、毛沢東にもつとも近い存在であつたという事実は消去できない。

華国鋒にとつては、「批判」一

彼らを遮断しなかつたのか、なぜ江青夫人は三十年間も毛沢東夫人であつたばかりか文化大革命以降は党中央の要職についたのか、といった疑問を感ぜざるを得ず、「毛沢東思想」と毛沢東路線の継承をしきりに強調する華国鋒政権としては、鄧小平を「反革命分子」として排斥し、みすから党第一副主席となつた天安門事件直後の党中央の決定に彼自身参予して

このような状況こそ、北京政変以後四月に近いというのに、依然として党中央委議会を開かれず、ましてや党大会ないしは全国人民代表大会などによつて華国鋒体制は認知されていまいけないことの大きな背景であらう。たしかに、この間、十二月下旬には全国人民代表大會常務委員会が開かれ、下旬には「農業は大業に学んで促進させることにならう。こう

が、これらの会議は、たとえは周恩来夫人の鄧超超女史が全人代常務委副委員長に任命されたとしても、このポストはもとも二、十三名も副委員長が存在するポストであることが示すように、政治的にはなんら大きな意味をもつてはいないものである。一方、最上層部としての党中央政治局常務委員会は、依然として華国鋒と葉劍英の二名のみであり、政策決定機能も果たし得ない。

そのようなとき、「鄧小平の影」がますます色濃くなつてきて

在り、天安門事件の「反革命分子」鄧小平の路線は、いまや完全に勝利したといつてもよいであらう。たと

そのようなとき、「鄧小平の影」がますます色濃くなつてきて

(東京外語大助教授)